

鳥籠理論そして陳雲 (チェン・ユン 1905-1995) について

福 光 寛

目 次

はじめに 陳雲そして鳥籠理論の評価をめぐる

1. 陳雲の人柄：まじめな努力家
 2. 労働者出身として共産党で頭角あらわす
 3. モスクワ行きで毛沢東と信頼関係築く
 4. 延安時代と処世訓：交換，比較，反復
 5. 陳雲の経済政策論
 - 5-1. 左傾主義の誤りに気付く
 - 5-2. 市場の不可欠性を確信
 - 5-3. 市場が解決できない問題への着眼
 - 5-4. 毛沢東との対立
- むすび 陳雲そして鳥籠理論の再評価
参考文献

はじめに 陳雲そして鳥籠理論の評価をめぐる

私は中国の指導者の経歴と思想を検討する研究を始めていて、その研究の対象として、馬寅初（マー・インチュ 1882-1982）を取り上げすでにその成果を投稿済みである（福光（2016b））。

今回取り上げる陳雲は、馬寅初から20年以上あとの出生であるが、学歴的には馬と正反対である。馬寅初は、清朝末期に北洋大学という当時の国内最高学府に進学し、選抜されてアメリカに留学。おそらく中国人として最初に欧米で経済学の論文で博士号を取得し、帰国後は北洋政府財務部

を経て北京大学教授に取まった。これに対して陳雲（チェン・ユン 1905-1995）は、父と母を幼くして亡くし、母方の叔父夫婦に養われるものの、その叔父夫婦も貧しく小学校卒の学歴しか得られなかった。そして上海の商務印書館で学徒（見習い）として人生を始めた。

しかし逆に陳雲は子供のときに貧しく、労働者として人生をスタートしたがゆえに、中国共産党の指導者として成功をおさめ、新中国の経済建設の事実上の最高指導者に上り詰めた。第二次大戦後、陳雲と馬寅初が初めて出会ったとき、陳雲は政務院副総理兼財政経済委员会主任。馬寅初は財政経済委員会副主任。その後、陳雲は新中国の経済建設の指導者として活躍するが、馬寅初に新中国の経済政策を決定する重責が回されること、あるいは両者の立場の再度の逆転は遂になかった。

新中国の経済建設の指導者というと鄧小平（トン・シアオピン 1904-1997）がそうではないかと考える人も多いと思われるが、それは1978年の改革開放期以降についてのお話し。しかもその鄧小平に政権復帰の道を開いたのは陳雲であり、新中国になってからの経済建設、1950年代の社会主義化を主導した責任者も陳雲であって鄧小平ではない。改革開放期についても、鄧小平に復帰の道を率先して開いたほか、鄧小平と仕事を手分けする形で陳雲が遺留問題とよばれる多数の冤罪の名誉回復問題を処理したことは、改革解放のスタートを可能にした大きな要因だった。そして市場と計画との関係についても「鳥籠（とりかご）」理論という形で、両者の関係を整理して見せたことは日本でも知られている。

ところで「鳥籠理論」は市場に計画の枠組みを被せるという考え方であるため、その提案自体を市場に枠を与える考え方として否定的にみる人、あるいはさらに陳雲を保守的な政治家とみる人は日本では多いかもしれない。しかしそうではないという説明をあとで述べたい。

ところで近年、陳雲について、中国で人気のある作家の叶永烈が2013年に『中国をゆるがした人物 陳雲全傳（他影响了中国 陈云全传）』を発

表した。なお永烈は1995年に香港の明報出版から『陳雲全傳』を出版したことがある。旧著と今回の新著との異同について叶永烈本人は説明していないが、新著は香港でなく大陸での発行。内容的には旧著刊行後の取材の成果を取り込んだもの。記述スタイルは、関係者に直接会い、関係する場所を尋ねて回るという取材記録形式であり読みやすい。他方で新著に、2000年代に入って大陸で刊行された『陳雲年譜』（2000）や『陳雲傳』（2005）などの基本文献の引用や参照指示がないのは、陳雲研究としては疑問が残る。

なお日本における陳雲研究としては、帝京の高橋満先生の「陳雲の経済理論」『帝京経済学研究』（第36巻第2号、2003年）がある。この論文は陳雲の経済政策担当者としての貢献を詳しく紹介され、その理論の形成過程、陳雲理論の経済発展論としての位置付けをまとめられた周到かつ精緻な論文である（高橋論文で抜けている問題は、中央政府の政策担当者となる前の経験がどのように政策の形成に役立ったかという問題である。2010年に出版された王杰論文では、上海での青少年期からのその発展を細かく議論しているが、上海での商業活動の経験や、解放区での経済建設の経験などが、市場と計画を統一する思想を生み出したとしている。王杰《陈运对计划与市场关系的探索和创造》载朱佳木编（2010）268-274）。

高橋論文（2003）はその結論部で、陳雲の「計画を主として市場を補とするモデル」と、「一窮二白」（貧窮しストックもなにもない）という認識をもとに「一大二公」（一に大規模、二に公有）を基本方針とした毛沢東モデルとを、社会主義の経済発展モデルとして対比している。毛沢東モデルには、労働力の組織化を人々の主観的能動性に頼っていることや、経済部門間のバランスをもたらす契機を欠いているなどの問題があるとして、陳雲モデルは、毛沢東の戦略が失敗する時期に、絶えず対極として意識されていたとする。しかし陳雲モデルは、中共中央が1984年10月に経済体制の改革に関する決定として社会主義商品経済体制モデルを提起したことで、

その指導的役割を終えた。陳雲モデルは全面的商品経済体制化への橋渡し役だったとの評価を与えている。

この高橋論文は、詳細な記述で裨益するところは現在もなお大きいですが、全面的商品経済体制化に向けた流れの中で、陳雲モデルを過渡的なものとした結論に疑問がある。

なお日本人の研究とはいえないが、邦文の論文として中共中央文献研究室の曹王旺氏が2009年8月に中国研究所での講演会で発表した論文「陳雲と中国改革開放政策の展開」(『中国研究月報』第63巻第10号, 2009年)がある。曹論文の記述も詳細を極めている。そのなかで陳雲が市場の役割を認めた議論をした理由として、1935年にロシアを訪れたときの経験を指摘している部分がある。そして証拠として陳雲の(『陳雲文選』に含まれていない)ロシア経験に関する発言を引用している。それによると、ロシア革命後、資本家の工場をすべて没収した結果として日常の生活用品の供給が困難になった。ロシアでは百貨店にも物がなかった。ボタンを買うためにさえ委員会への申請が必要で、許可まで長い時間が必要だったなど。このように陳雲が、市場を麻痺させたロシア社会の実情を経験していたからこそ、市場の役割を生かす必要があるという考えになったと曹は説明する。これは大事なお話しておそらくロシアに行った中国の革命家たちは(以下は推測であるが)、現地生活して、ロシア型社会主義が経済システムとして失敗していることを生活の不便さのなかで実感したのではないか。また1949年の新中国成立後について言えば、中国で社会主義化を進めた結果、今度は中国での日常の経験を通じて、社会主義化が、生活の豊かさとか便利さと全く相反するものであること＝市場を生かさぬ社会主義化が失敗であることに、早い段階で気が付いたのではないか(中国の政治指導者が、社会主義経済への移行の途中で市場メカニズムの回復を一斉に主張した状況については福光(2016a)198-201を参照)。曹論文は1956年以降の陳雲の議論の意味をつぎのようにまとめている。

「1953年からの数年間、計画経済が行われた。1956年になって陳雲は、旧ソ連の経験・教訓に鑑み、中国に対する研究にもとづき、計画経済を行うことで市場が無視され、市場の停滞がもたらされたと認識し、社会主義の土台の上に立って1953年以前の状況に戻し大計画、小自由を実現させるよう、主張した。これはつまり、計画経済をベースに市場の役割を果たすことを求めたのである。」（曹（2009）9）

なお曹論文でもう一つ注目される記述は、1972年春、江西から北京への復帰を果たしたばかりの陳雲が、周恩来から依頼を受けた対外貿易問題の研究が、実はプラント輸入に関係する重大な政策決定の処理であったことを明らかにしている部分である。

そして結論部で、鄧小平と陳雲の違いを、戦略目標の決定か具体的な段取りの確定かの違いであり、両者は革新と保守として対立していたのではなく、互いに補い合う協力関係にあったとしている。一般に鄧小平と陳雲との関係は、鄧小平を改革派とみて、陳雲を保守派の代表の一人のように解説される場合があるが、両者の関係についてこの曹の解釈（役割分担説とでも表現しようか）は魅力的である。つまり陳雲の鳥籠理論と呼ばれる社会主義経済論は、鄧小平が十分展開しなかったことを補足、あるいは補完する議論なのではないか。

ところで鳥籠の含意について興味深い説明をしたのは高鴻业（ガオ・ホンイェ）（1996）である。高はまず中国のような発展途上国では、通信、運輸、港湾などハード（硬件）の不足があり、これは市場メカニズムのままでは不足するので、国家がこれを計画して建造してゆく必要がある。同様に、集中経済下にあった中国では、法律や業界ルールなどソフト（軟件）も不足していた。巨大な人口が生み出す衝撃の大きさは時に国家の行政命令を必要とするとしている。あるいはそれゆえ、中国では、計画と市場の結合が必要（つまり国家が登場して市場を運営することが必要）で、陳雲のいう、鳥と鳥籠の比喩はそのことを意味しているとしている。この説明は、

ソフトとハードが不足しているからという、発展途上国中国の事情を前面に打ち出して鳥籠の説明としている。そして高は先進国における、恐慌期の国家の役割にも言及している(高鴻业《计划与市场在经济发展中的关系》载《陈运和的事业》上, 1996, 452-460。なお《高校理论战线》1996/04, 17-19にも同一論文がある)。

高鴻业(1996)は、(社会主義)市場経済体制における国家あるいは計画の役割を鳥籠として、説明している。

以上の諸説に対して、鳥籠をマクロ的なコントロール(宏观控制)と言い換えて、整理して述べているのが朱佳木である(朱佳木《研究陈云经济思想的现实意义》载《陈云研究述评》(2004), 920-943, esp. 938; この論文は以下でも読むことができる。朱佳木(2010) 462-488)。なお鳥籠=マクロ的なコントロールという表現は、刘武生(2001) 260-262にもあるが、初出はさらにもっと前にさかのぼれるかもしれない。朱佳木の言わんとするところは、先ほどの高(1996)の説明を含み、まさに国家の役割の議論になっている。

朱佳木(2010)は、最初に、鉄道、道路など、あるいは教育、科学技術などへの投資を重点的に行って、経済発展の条件を整備することを「鳥籠」として指摘している。それから産業間のバランスを考えた経済計画の役割が指摘され、さらに経済犯罪や脱税を防止するための厳格な法規の必要性が指摘されている。そして最後に、景気変動に対応する財政金融政策の役割が指摘されている。これらをまとめるなら、経済活動面での国家の役割を鳥籠だと言っている。

そこまでいうなら、これは体制を超えて市場経済のもとでの国家の役割の議論になるのではないか。中国語の論文をあらためて調べたところ迟爱萍(ツー・アイピン)が、2010年に似た指摘をしている(迟爱萍《陈运与中国经济论纲》(下), 《党的文献》2010年第4期; cf. 邱霞(2012) 98-99)。計画と市場のいずれが主であるかの議論のあとに、鳥籠の話が出てきたことに注目して、資本主義にとっても社会主義にとっても、計画と市場を密接に

結合することは、国民経済の管理にとり最良の選択であるとまとめている。わたしはこの朱佳木や迟爱萍の解釈に賛成である。

このほか、陳雲の議論で近年注目されているのは、人々の生活を豊かにすること（改善民生）を経済建設の目的と置いた点がある（この点たとえば、李为善《陈云经济发展中的“人民第一”思想》载朱佳木编（2010）315-321；欧阳雪梅《试论陈运的民生思想》同前 382-389；谢冠富《陈云关于民生与政治的思想》同前 389-395 など）。そしてこれらの論文に以下の指摘がある。陳雲が、一部の共産党員が社会主義や共産主義の理想を忘れて、私利に走っていると批判したこと（同前 315）。あるいは、陳雲が人民の福利をはかることを党の活動の出発点とすることを要求したこと（同前 382）。これらの指摘は陳雲を介して、現在の中国共産党に注文を付けていると読むこともできる。また環境汚染や資源問題など経済建設が進展することに伴う負の諸問題に陳雲が目を配っている点も注目されている（たとえば王家云《陈云的发展观是科学发展的思想渊源》，《毛泽东思想研究》第 22 卷第 3 期（2005）は後者を経済の持続的発展の問題として指摘している）。

1. 陳雲の人柄：まじめな努力家

まず陳雲の学歴が小学校卒で、その人が大国中国の新中国経済建設の指導者を務めることがそもそもなぜできたのかと不審に思う人がいるかもしれないが、彼は正規の教育を受けた期間こそ短い、労働者としても共産党員としても、比較的知的な仕事に従事した。最初のロシア滞在（1935-36）では英語を学び、共産主義者の幹部養成学校（レーニン学校）で半年間学んでいる。また 1937 年末からの延安での生活では、大量の読書と著述を行っている。その読書の範囲は、決して広いとはいえない（教養主義的な多読とはいえない）が、かといって少ないともいえない。マルクス主義関係の文献については熱心に勉強したといえるのではないか。陳雲の勉強について私がまず注目するのは、陳雲の外国語の勉強である。知識への強い渴

望がベースにあり、自発的なものだけということ。後述するように、彼は労働者という出自が有利に働いて共産党で短期間に昇進し、若くして党のリーダーの一人になった。とはいえ与えられた職務をこなす上で彼は多くの知識を必要とし、その知識を取得するための努力を彼は惜しまなかった。

まず1925年に共産党に入党したときの知識はどのようなものだったか。彼自身の記述から、20歳の陳雲の知的レベルが決して低くないことや生真面目さが読み取れる。

「入党にはストライキ運動や階級闘争が影響した。このとき『マルクス主義簡説』『資本制度簡説』を読み終わり、『共産主義ABC』は読んだものの理解はしていなかった。これらの本の理屈(道理)は三民主義よりずっと良い。ストライキ闘争と2冊を終えたところですぐに入党した。ただ入党した時、以下のことをすでに考えていた。入党したら自分がかつての自分ではない。今後は結婚して事業を行う(成家立业)のではない。革命にかけるのだ。この人生観の改革は、以後の私に大きな助けとなった。」(以下を参照。朱佳木(2000)上25;朱佳木(2010)5)

なお近年の陳雲研究は1925年から26年にかけての勉強の様子を解明している。当時、勤務する商務印書館の書籍のほか、同僚の紹介で、上海通信(通讯)図書館で閲覧したほか、入党後は党内の勉強会でマルクスやレーニンの著作を学んでいる。注目されるのは、ロシア語が重要だと考え、上海在住のロシア人(商務代表のスラカフスキ)と接触して、ロシア語を学びロシア事情や中国革命の見方を話し合ったとされること(刘启芳《陈运的苏联情缘》载朱佳木编(2010)612-619, esp. 612-3)。積極的な姿勢がうかがわれる。1935年にロシアに着いてからの英語の勉強については、1942年に地方幹部向けの講演で語っている。この講演は、勉強好きの彼の持ち味もよく伝えている。

「1935年にロシアに着いた時、英字紙が理解できないので、人に中国語に訳してもらった。その後近くに住む大学生について英語を習い、数ヶ月

かけて新聞の情報がまあまあわかるようになった。その前は英文文法を理解してないのだから、そのときわからなかったのはあたりまえだ。普段よく接触するものは、理解は容易だ。15歳で私が上海で学徒（見習い）だったとき、最初は（中国語の）新聞でさえ理解できなかった、数年経って読んで理解できるようになった。我々は文化とは学べるものだということを信ずるべきだ（我们应该有可以学好文化的信心。）そして学校での学習年限は限られ、仕事を離れるわけにゆかないのだから、主要な方法は自習だといって具体的な方法を語っている。「仕事をしているときに学ぶ主な方法で、最も良いのは、数冊の本を衣服に忍ばせることだ。持ち歩く袋に入れておくのだ。暇ができれば読む。お金があつたら、服は作る必要はない。数冊本を買う、いや一冊の辞書、「字源」を1冊買う。」と続けている（在西北局高干会上的讲话 19421116 陈云文选1卷；cf. 朱佳木（2000）上191）。

1938年からの延安における勉強については1987年になって、これが丸5年もの長期にわたるものであったとつぎのように振り返っている。

「延安で私が組織部長だった時、毛沢東が私に3回求めてきた。哲学を勉強しなさい、学習を助けるため教員を派遣してもらいなさいと。あの時中央組織部には、6人からなる学習グループができていた。私と李富春、陶铸（当時王稼祥の政治秘書だった）、王鶴寿、陳正人、王徳。そのほか数名の後列で聞いている議員がいた。学習小組はあまり多くの人はいない。おおむね同一の理論水準の人がいい。学習方法は毎週数十ページを読みそれから討論。研究学習中に行き当たった問題や各種の意見をすべて議論する。」「我々は1938年に学習をはじめ5年間続けた。最初に哲学としてまず『共産党宣言』を再読。それから哲学や政治経済学などを学んだ。ほかに我々が読んだのは、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの関連する著作のほか、毛主席の『中国革命戦争の戦略問題』『実践論』『矛盾論』『持久戦を論じる』である」（身负重任和学习哲学 19870717 陈云文选第3卷；なおこれと同じことが以下でも語られている 对起草《关于建国以来党的若干

历史问题的决议》の几点意見 198103 陳云文選第3卷)

この延安における「勉強」は、延安で行われたとされる整風運動と呼ばれる思想運動のなかでの学習活動（整風学習）のことを指している。したがってほかの中央委員が勉強せず、陳雲だけが勉強していたということではない。そうではあるが、文面からは嫌々やったという感じよりは、学習を楽しんだ様子がかがえる。なお整風運動については多くの文献があるが、以下は整風運動の経過を要領よくまとめている。

蕭一平《延安整風運動—回忆与研究》，中央文献出版社，2012年

2. 労働者出身として共産党で頭角あらわす

陳雲は、現在は上海市に属する江蘇青浦の人。1905年6月13日に貧しい農民家庭に生まれた。二歳のとき父（陳梅堂）を、また4歳の時に母（廖順妹）を亡くした。そのため裁縫を生業とする母方の叔父（廖文光）に養われた。1919年高等小学科を卒業後、上海商務印書館で学徒（見習い）となった。

幼くして両親を亡くした陳雲とその姉を養ったのは母方の祖母であるが、この祖母も間も亡くなり、陳雲は裁縫をしていた母方の叔父夫婦に養われることになった。しかしその生活も苦しく、叔母は小さな飲み屋を始めた。その手伝いもあり、7歳のときに（9歳説は後述する）陳雲は小学校に入学したものの学校をあきらめざるを得なくなった。このとき飲み屋の客に顔安国民小学校長の杜衡伯がおり、聡明な陳雲の学業が失われたことを惜しみ、自身の学校への無料での入学を認めた。陳雲はこの支援を生涯忘れたことはなかった。1919年に陳雲はこの小学校を14歳で卒業したが、中学校に進むことは金銭的にできず、小学校の時の教師張行恭の弟が勤める上海商務印書館の見習い（学徒）の仕事を紹介され、上海に出ることになった。一つの偶然は、印書館が1921年に創立されたばかりの中国共産党の重要な拠点になったことである。陳雲は1925年に入党。1925年6月下旬

に印書館工会（労働組合）が設立されると中心メンバーの一人になる。8月に工会はストライキを行い、成功裏にストが収束させる。しかし1927年9月末に陳雲は上海を離れて故郷の青浦に戻らざるを得なくなる。1927年の四一二政変（蒋介石が国共合作の協定を破り共産党排除に乗り出した事件）のあと、上海では多くの共産党員が捕縛され虐殺された。陳雲も名前がでていたため逮捕されるおそれが高まった。そこで共産党の指示で農村に入り、農民運動を組織することになった。1928年1月には農民革命軍を組織して、米を奪って分配するなどの行為を行った（13日）。これに対し地主たちも武装して自衛団を作り、状況を省政府に報告。省政府は国民革命軍に救援を求め、現地に軍隊が派遣され交戦が始まった。（おそらく農民革命軍は正規軍の前に非力だったとおもわれるが）19日に農民革命軍の正副指揮官がつかまり、26日に銃殺された。陳雲はその後も活動を続けたものの危険になり、1928年9月に故郷の青浦を離れている（叶永烈（2013）pp. 2-16）。

なお陳雲の学歴については、『陳雲傳』（2005）の以下の説明が詳細である。陳雲は1914年9歳のとき、近くの貽善小学校に入学する。これは初等学校で2年後の1916年に卒業。叔父夫婦はさらに1917年夏に商業学校に入学させる。珠算と記帳の勉強で3年の就業年限であったが学費が続かず1ヶ月余りで退学。ここに杜衡伯が現れ、陳雲は1917年深秋、12歳で顔安小学高小部に入学。1919年の夏卒業したとする（『陳雲傳』（2005）8-13）。この学歴の記載が一例であるが、叶永烈（2013）は『陳雲年譜』（2000）や『陳雲傳』（2005）の詳細な記述に従って自身の記述を書き直していない。これは陳雲研究としては疑問が残る。機会があれば、そのようにした理由を叶永烈本人に聞きたいところだ。

このあと上海に戻った陳雲は共産党の組織のなかで出世してゆく。すなわち1930年と1931年、前後して中共六期第三次中央委員会全体会議（六届三中全会）、四次中央委員会全体会議（四中全会）で中央候補委員、さらに中央委員に選ばれた。1931年5月に中共中央機関安全的中央特科書記

に任せられ、9月には臨時中央領導メンバーとなった。1932年に臨時中央常任委員、全国総工会党団書記になった。1933年に中央革命根拠地に入り、1934年六届六中全会で中央政治局委員、常任委員に選ばれ、白区工作部部長を兼任した。

このスピード出世の背景には、当時、中国共産党を指導していたコミンテルンが、中国共産党の指導者として知識人より労働者出身者が好ましいと判断を変更したことがあった。この出身階層の問題は、陳雲に関しては生涯有利に働いた。

すなわち陳雲が1930年の中共六届三中全会で候補中央委員（中共中央のリーダー候補）に選ばれた背景にはコミンテルン（共産国際）の意向が働いている。当初コミンテルンは知識分子が外国語を理解し、マルクス主義の原書を読めることから、陳独秀（1879-1942）のような知識分子を中国共産党の指導者として期待したが、陳独秀は右傾機會主義の過ちを犯した。陳独秀はコミンテルンの指示もあって国共合作を進め、孫文（1866-1925）が亡くなったあとも汪兆銘と組んで国共合作の延命をはかるが汪兆銘の変心により合作は瓦解した。右傾機會主義の過ちとは、この国共合作へのこだわりを指している。続く知識分子の瞿秋白（1899-1935）は左傾機會主義の誤りを犯した。この左傾機會主義とは、瞿秋白が最高指導者であったときに、武装蜂起を起こしたがいずれも失敗したことを指している。こうした経験は知識分子の動揺性を示すとコミンテルンは判断し、1928年6月モスクワで行われた中共六回大会は総書記に労働者出身の向忠發を選んだ。このように党指導者の出身階層が問題にされる雰囲気なかで、労働者出身の陳雲は中央指導部で昇進を続けた。そして1931年の六届四中全会では中央委員に選ばれた（叶永烈（2013）18-23をベースに補筆）。

ところで以下は少しあとの1939年に党員の入党資格について、陳の名前で発表された文章である。入党資格は組織の問題だから、これは彼単独の考え方ではない。出身が労働者か否かで差別しているが、結果としてそ

うした出身の黨員に有利に働く規定ともいえる。そしてこうした考え方は、陳雲のような労働者出身の黨員に都合のよい考え方であった面は否定できない。

「共産党は無産階級の先鋒隊であり、無産階級の中の覚悟ある先進分子により組織される。ただし無産階級の先鋒隊になるには、黨員の要素（成分）を系統的に注意して調整しなければならない。第一にまず優秀な労働者（工人）の要素を強化する。」「労働者の要素は党の基礎であり、党は、自身の組織の中の労働者の要素の強化をとくに注意する。」入党手続きで労働者や農業労働者は黨員一人の紹介が必要。小資産階級出身者は黨員2人の紹介が必要。その他政党からの転入者は3人必要。入党前の候補黨員の期間については、労働者と農業労働者について候補期間は不要、貧農と手工業者は1ヶ月、革命学生、知識分子、小職員、中農、革命軍人は3ヶ月などとされている。（怎样做一个共产党员 19390530 陈云文选第1卷）

客観的に見るとこの規定は労働者出身者に甘く、労働者出身という側面を過度に強調しているようにみえる。しかしこのような労働者偏重の党の体質ゆえに、後年、文化大革命の時代（1966-76）に、右派とみなされても彼は極端にひどい扱いを受けなかったともいえる（なお学生運動から共産党に入った、陳雲の奥さんの于若木が、同じ文革期、下放先で江青批判を行ったため、隔離審査、党籍除籍、職務停止などの処分を受けるなど、陳雲とは異なり辛酸をなめたことは、以下に記述されている。朱佳木（2000）下 158；朱佳木（2010）176）。

1969年10月林彪は命令を出し、老革命家劉少奇、陳雲、鄧小平、李先念、叶劍英、王震たちの離京を命じた。しかし文革期の陳雲に対する扱いは、中央委員の名義を失わなかった点や、周総理自身が、配置先、暖気の手配、接触する人の数を減らすなどの配慮をしたことなど別格の印象が強い。叶（2013）は、陳雲や鄧小平など、中央工作を多年行ったものの扱いに配慮があったとする。陳雲の場合は秘書・警備員・炊事員の同行が認められ、宿舎は客間、食堂、書斎、秘書と衛視の寝室、陳雲の書斎とトイレ。

別棟があり、台所、運転士と料理人の居住場所があるというもの。この宿舎の構造をみると、体面を保つ配慮が伺える。派遣された工場（江西省南昌市の石油機械工場）では、工場のなかのさまざまな会合に出席して聞き取りを行った。離京2年後の1971年9月13日に林彪の事件が起き、周恩来は一部老幹部の起用を始める。そして手続きを経て1972年4月22日に北京に戻るため陳雲は出立した。この江西に追いやられた2年あまりの間、陳雲は、魯迅、毛沢東、マルクス＝エンゲルス、資本論、レーニン、スターリンなどを読むなど読書に励んでいる。資本論については延安で一度、そしてこの派遣先で今一度読んだとのこと。北京に戻った陳雲は周恩来から国務院で国際情勢と対外貿易問題を研究するよう依頼を受ける。

以上の文化大革命期についての記述は、诸天寅(2012) 137-143, 213；叶永烈(2013) 220-250をまとめたもので主として叶永烈の記述に従った。なおここも『陳雲傳』(2005)の記述(同1355-1395)が参考になるが、同書は、工場で労働に参加したという憶説をはっきり否定している。すなわち、彼の体が虚弱で病気勝ちであること(体弱多病)を知ると誰も彼に体を動かすことを勧めなかった。そこで彼は毎日決まった時間に来てゆっくり(木模)と2つのグループの学習に参加した(『陳雲傳』1386)。

3. モスクワ行きで毛沢東と信頼関係築く

1930年代の上海に記述を戻すと、ほどなく事件が起きる。1931年に上海で共産党の組織防衛の責任者である顧順章(労働者出身)が逮捕され、寝返って(叛変)秘密を漏らすのである。そして総書記の向忠発も武漢で逮捕され、同様にすぐに寝返っている。結果として上海の共産党組織は大きな打撃を受ける。そして共産党員にとり危険な上海の中央組織に残った陳雲の党内での地位はかなり高いものになる。

この1931年の事件の経過を詳しくみると、まず六届四中全会で中央政治局候補委員に昇格したばかりの顧順章が逮捕された(4月25日)。彼は

労働者出身で組織と幹部の安全を保つための共産党内の組織の責任者で、党内の機密を良く知っていた。問題はその顧順章が逮捕後すぐに寝返ったことであった。一部の幹部は直ちに上海を離れるが、結局6月22日武漢で総書記の向忠発が逮捕される。この労働者上がりの総書記も、すぐに寝返り多くの秘密を詳細にしゃべった。向忠発は逮捕3日後の24日に、命乞いの末に処刑された。このとき総書記のポストに近かった王明は1931年10月にモスクワに逃避した。上海に残った幹部として陳雲と康生がおり、陳雲は総務責任者、康生は防衛工作の責任者となった。つまり、陳雲は党内の最上位ポストに昇進した（同位は陳雲を含めて6人で書記は置かれず、総責任者は博古である）（叶永烈（2013）24-27）。

このあと1932年10月に上海共青团の中央機関が国民党特務機関の搜索を受けた。そして逮捕された共青团書記の袁炳輝がこれまでの逮捕された者と同様に寝返った。上海にとどまる危険は増し、コミンテルンの了解を得て中共臨時中央の博古、張聞天、陳雲の3人は上海を離れ、毛沢東が守る根拠地の江西に向かうことになった（1933年1月）。江西に入った陳雲は瑞金で全国総工会の事務を劉少奇とともにとったとされる。また陳雲は1934年1月に瑞金で行われた中共六届五中全会で中央政治局委員に選ばれた。しかし国民党軍の包囲が狭まるなか、1934年10月10日中央紅軍は西征を開始した。これがのちに長征とよばれる大遠征のはじまりとなった。陳雲は第五軍団における中央代表として第五軍団とともに瑞金を出発した（叶永烈（2013）34-41）。

この長征に向かう途中の遵義で1935年1月大事な会議（遵義会議）がもたれた。陳雲のまとめによれば、この会議で博古はこの間の誤りを認めて指導者の立場を張聞天に譲った。他方、常任委員に新たに毛沢東が選ばれ、今後は毛沢東、張聞天、陳雲の3人の常任委員が決議案を審査する。軍の最終責任者は周恩来とされた（参照 遵義政治局扩大会议转达提纲193501 or 03 陈云文选第1卷）。

遵義会議で、陳雲が毛沢東を支持したことで、陳雲は毛沢東の信頼を得た。そしてモスクワに赴き、遵義会議の結論を報告する重大な任務を陳雲は受けた。ただそれを実現するには、国民党軍の包囲をすり抜けて、国民党支配下の上海に入り、そこからロシアに向かうことが必要だった。かれは地下黨員や、上海の民主人士の協力を得て、1935年8月 ロシアのモスクワに到達。ロシア側に遵義会議の結果を報告することに成功した。その後、すでに述べたようにモスクワのレーニン学校で勉強する機会を得たあと、1936年12月に帰国のためモスクワを離れている。最終的に延安で毛沢東と再会するのは、さらに1年後。毛沢東と別れて2年半近くがたった1937年12月のことであった。

この毛沢東の依頼によるモスクワ行きは、危険でしかし重要な任務だった。まずソビエト区は敵に包囲され、言葉の違う四川を通る必要があった。そこで途中までは紅軍が護衛につき、その後は案内人となった地下黨員の席懋昭とともに成都から重慶経由で上海に向かった。上海についたのは1935年6月末。上海では1年後の1936年11月に七君子事件（共産党とよりは日本と戦うべきだと主張する救国運動の7人の指導者が逮捕された事件）の当事者の一人になる、浙江実業銀行副総経理の章乃器と連絡をとった。章乃器は戦後の1957年の反右派闘争で右派分子として重点批判対象にされてしまうが、実は二次大戦前、共産党との関係は密接で共産党地下組織を支援していた。また孫文夫人の宋慶齡も共産党の協力者で、陳雲は宋慶齡に密会して、ソ連への脱出の手助けを求めた。彼らの支援を受けて、陳雲は上海から貨客船でウラジオストックに向かい、あとはシベリア鉄道でモスクワに入った。上海を立ったのは8月5日、モスクワには8月20日に到着した。そして10月15日、モスクワの共産国際執行委員会書記処会議で遵義会議についての報告を行った。もちろんロシア語の報告は、誰かが翻訳したわけだが、書記処会議で遵義会議での毛沢東の主導権確立を認めさせ、中共中央と共産国際との関係を修復した意味は大きい。その後、滞

在1年4ヶ月で1936年12月にモスクワを立って帰国に向かうが西安事件の影響でアラムトにとどまった。1937年4月からは中共中央の新疆代表として新疆迪化に赴任している。その後1937年12月 陳雲は迪化を經由したモスクワ発の飛行機に同乗し、王明、康生とともに延安に降り立ち、ほぼ2年半ぶりにようやく帰国した。なおソ連にいたときソ連の経済モデルを研究したとの指摘がある（叶永烈(2013) 56-72）。

なおここで陳雲が1935年にモスクワに行くとき、上海での協力者として宋慶齡の名前がでてくる。彼女は長年にわたり共産党中央と連絡をとっていた。1927年に蒋介石が四一二政変をおこしたあと、宋慶齡は、七・一四声明を出して、蒋介石の行為は孫中山（孫文）の意志に反すると蒋介石を批判し、共産党との連携を表明した。このあと共産党と宋慶齡は秘密の連絡を維持したとされている（以下を参照。徐万发(2012) 20-21, 88-89）。また宋慶齡が陳雲の出国を手助けした点は、宋慶齡が1981年に亡くなった後に明かされた点の一つである（詳細は以下に記載がある。尚明軒(2002) 397）。

4. 延安時代と処世訓：交換，比較，反復

このあと陳雲はしばらくであるが延安で比較的平穏な生活を送る。まず奥さんになる于若木と知り合い、1938年3月に結婚している。彼女のお父さんの于丹拔は中国から初めて日本に送られた留学生の一人。早稲田大学に留学して日本語に堪能。帰国後山東第一師範の校長を務めた知識人である。彼女はその3女。彼女の一族には学者が多い（叶永烈(2013) p. 99-120）。

陳雲は延安時代にとくに毛主席の文書を集中して読んだ結果、その教えは「实事求是」にあると考えるに至ったとしている。それから50年後の1990年に陳雲はこの教えの本質を「不唯上，不唯書，只唯実，交換，比較，反復」の15文字にまとめている。この言葉の最初の9文字の解釈は

少し議論のありうるところ（中国国内でもインターネット上でさまざまに議論されている）だが、私の個人的な読み下し文は「権威によらず、書によらず、ただ実際がどうであるかを問題にする、意見の交換、事象の比較、考慮の反復を経て誤りのない判断にたどりつくことができる」というもの。この15文字は奥深いことを指摘しているようでもあり、また慎重に考える手順を言っているだけの文章ともとれる。私には、政治的に厳しい争いの世界を生き抜いた陳雲の処世訓として、また実務で誤りを避ける要諦を示す言葉であるように思える。なお文選の中では最初の9文字は1990年の談話で初めて現われる。同趣旨の発言は1947年と1962年さらに1978年の文書にも見られるが、いずれも後段の6文字だけである。このことから考えるに、後段の6文字がもともとの着想。しかしこの6文字だけでは言葉に重みがないので、前段の9文字を付け加えたものではないか。詳細は以下を比較されたい。

怎样才能少犯错误 19470207 陈云文选第1卷

怎样使我闷的认识更正确些 19620208 陈云文选第3卷

关于当前经济问题的五点意见 19781210 陈云文选第3卷

不唯上，不唯书，只唯实，交换，比较，反复 19900124 陈云文选第3卷

なお延安に入ったときに陳雲は中共中央組織部部长に任命され、当初は党の中心でまさに党組織の建設を担った。

しかし1944年3月に西北財經事務所（办事处）の副主任、政治部の主任に任命され、中共中央の陝甘宁边区の財政經濟工作进行を主管した。ここから陳雲の經濟官僚への転身が始まる。1945年6月には七届一中全会で中央政治局委員に継続当選し、8月には中央書記処の候補書記に任ぜられた。このようにして、財政經濟工作进行を担当するという異色の経験を積み始めるのである。

5. 陳雲の経済政策論

5-1. 左傾主義の誤りに気付く

抗日戦争勝利後、陳雲は重要な戦略的意義のあった東北解放戦争に参加した。北満と南満を転戦し、中共中央北満分局書記兼北満軍区政治委員、中共中央東北局副書記兼東北民主連合軍副政治委員、中共中央南満分局書記兼遼東軍区政治委員、東北軍区副政治委員、東北財政経済委员会主任、沈陽特別市軍事官制委员会主任などの職を歴任し、東北全域の解放と東北経済の回復に貢献した。1948年8月ハルビンで行われた第六次全国労働大会で「当面の中国職工運動の総任務」と題した報告を行い、その後10月には中華総工会主席に選ばれた。

この「総任務」を見ると、地主階級の消滅という言葉のみ激しいが、それ以外の書かれていることは常識的で、極端な議論は見られない。

まず農村では土地改革を行い、地主階級を消滅させ耕すものが田を保有する制度を実現するとする。都市については、官僚資本は没収するが民族工商業は保護する、企業（工場）については労働者職員の代表を入れた企業（工場）管理委員会を設立して、企業管理の民主化を進めるとしている。企業管理の原則には、民主化のほか、原料の不足の解消 品質の改善 生産量の多さ 販路の拡大が指摘されている。労賃については平均主義に反対し、職務・能力・技術・労働強度を考慮した累進労賃制度が提唱されている（cf. 当前中国职工运动的总任务 19480803-0804 陈云文选第1卷）。

しかしこうした常識的な政策が、最初から出されたわけではないことは注記しておく意味がある。この「総任務」の4ヶ月前に陳雲が出した「遼東土地改革中の教訓」を見ると、地主をひとくくりにして団結を考慮せず中農を打倒、工商業の保護政策が厳格に執行されないなど左傾の誤りが生じて、多くの死者が出たことを記録している。そのうえで、（1948年に入って）中央と東北局は、左傾の誤りを正し始めたとしている。商工業政策で

の混乱の原因は、商工業を保護、経済を発展させることが、都市の労働者、農村の農民、戦争の支援、そのいずれにも有利であることがなおはっきり理解されていないことにあるとしている (cf. 辽东土地改革工作中的教训 19480416 陳雲文選第1巻なお陳雲は自身の失敗をみんなに知ってもらいたいと、「陳雲文選」編集者のこの文書を削除する方針に同意しなかったとされる。以下を見よ。朱佳木 (2010) 537)。

左傾の誤りに陳雲自身に個人的にどこまでの責任があったかは別にして、陳雲が施政中も人命の損失に至る多くの左傾の行き過ぎが生じたことは間違いない。その経験と反省の上に、中道寄りの常識的な体制移行の提案に陳雲は辿りついたとみるべきではないか。

5-2. 市場の不可欠性を確信

中華人民共和国成立 (1949年10月) 後、中央人民政府委員、政務院副総理兼財政経済委员会主任に任命され、全国の財政経済工作进行を担当 (主持) した。1950年10月中共中央書記処書記に任命された。全国財政経済の統一、金融物価の安定、抗米援朝戦争勝利の保障、糧食・綿花など多岐にわたる政策決定のかなめに彼はいた。戦後インフレの終息の目的もあって、主要農産品の統一購入統一消費=統購統消 (統购统销·····購入·消費の政府統制) を進め、続けて、私营工商业の社会主义改造=公私合营を進めている。1954年に国务院副総理に任命された。前後して商業部部长、国家基本建設委员会主任となった。

この時期の陳雲の役割は、まず戦後インフレの終息に向けた役割があり、その後は、経済システムの社会主义化に向けた役割がある。ここでの問題は社会主义化の一面的加速を求める毛沢東に対して、陳雲を始め、実務を行う側がさまざまに異なる提案をしたことである。実は社会主义化を進めたところ、さまざまな問題がすぐに表面化した。

1953年に統購統消が開始された (表1)。1954年7月の陳雲の報告では、

表1 文革期までの新中国の年表

1949	新中国成立
1949-52	回復時期
1950	全国の財政収支、物資調達・現金管理の統一
1952	農業・手工業・工商業に対する社会主義改造を進める過渡的総路線の提起
1952	社会主義改造の開始
1953	第一次五カ年計画（1953-57）の開始
1954	規模の大きな私営工場を逐次、公私合営に転換
1955	農業合作化運動の高揚
1956	毛沢東「十大関係を論じる」
1956	生産手段私有制の社会主義改造の完成
1956	農業合作化の基本完成 農業生産の増加速度低下始まる
1957	毛沢東「人民内部の矛盾を正しく処理する方法について」
1958	大躍進運動（1958-60）の開始 農業生産合作社の農村人民公社への転換
1959	農業生産の3年続く大幅低下
1960	軽工業生産の低下
1961	重工業生産の大幅低下
1961-65	調整時期
1965	国民経済 正常状態（1957年の水準）を回復
1966	文化大革命の開始
1967	公私合営企業の配当（定息）廃止 全民所有制企業への転換
1967-68	全面内戦

資料：薛暮桥 1983 (2009) 17, 22-23, 25, 34, 39-41, 44, 51, 166, 252

これはモノ不足による物価高騰の解消をめざして、工業品、農産品について国家が買い取り、また国家が販売するというもの。これは卸売業を国家が独占することを意味していた。1954年には都市の小売業についても国营商業に統合する方針が示された（加强市場管理和改造私营商业 19540713 陈云第2卷）。その2ヶ月後の報告で、まだモノ不足が続いていることを認めたが、その原因は購買力が高まったためで、生産量はむしろ増えていると説明している（关于计划收购和计划供应 19540923 陈云文选第2卷）。

これらの社会主義化政策の問題点の指摘が1956年に入るとすでに始まっている。ここからは想像だが、問題はすでに統購統銷開始直後から認識

されていたが、党内での議論の末に1956年に入ると報告などで公表して構わないとの判断になったのではないか。

「公私合営における注意すべき問題」と題した講演で陳雲は、社会主義化が何をもたらしたかを語っている。公私合営により、人々のそばにあって、遅くまで店を開けて、小口の販売もする小商店の、積極的なサービスをなくし一律のサービスにしたのは正しかったか。統一した結果、競争がなくなり、企業も店も品質に気を回さなくなり、北京の有名な店でさえ、おいしくなくなったと指摘している（公私合営中应注意的問題 19560125 陈云文选第2卷）。

この問題は2ヶ月後「公私合営後の一連の問題の解決方法」で再度説明されている。まず人々の生活を不便にするような、店舗の統廃合があったことを認めて、それを自分の責任だと事実上謝っている。公私合営化された商店や工場は、今後10年は現状を維持するとしている。つぎに私営の方が公私合営に比べて、積極性に優れていたので商品の質も高く、種類も多かった。現在は政府の注文に応じるだけで消費者のニーズを考慮することがなくなったと現状を批判。これを改善する方法として、統購包消（＝統購統消）を一部の商品については廃止すること（对有些商品…国家不再统购包销）を提案している。新商品の提案に奨励金を給付すること、品質の高いものを高く低いものは安く買い取る仕組みが必要であることが、指摘されている（公私合営后一些问题的解决 19560320 陈云文选第2卷）。

興味深いのは統購包消の廃止に踏み込んだ提案だ。これは明確に社会主義化政策の破たんとして失敗を示している。このあとに2つ重要な演説がある。

一つはここまでにも語られた個人企業（小商店・手工業）の積極性を肯定、小業主に問題を拡張して論じた全国人民代表大会での発言。個人企業については、国营商業の中に組み込む形で社会主義商業の中に残すことが可能だとしている。他方、小業主については、その経営管理生産技術の知識には有用なものがあり、粗暴に小業主に否定的態度を取ってはいけなし、

表2 陳雲の3つの主体、3つの補充論

	主 体	補 充
経 営	国家経営 集団経営	個人経営
生 産	計画生産	自由生産
市 場	国家市場	自由市場

資料：福光 (2016a) 200 表 1

性急な改組を慎み十分な準備をして進めることを求めている（在第一届全国人民代表大会第3次会议上的发言 19560618 陈云文选第2卷）。

もう一つは1956年9月、中共八大での「社会主義改造基本改造以後の新たな問題」での発言である。これは一般に「三個主体 三個補充（三个主体三个补充）」（表2）あるいは「市場補充論」を提示した発言として知られる。考え方によっては、ソ連型の経済モデルとは異なる社会主義経済のあり方を提示したともいえる。

すなわち、社会主義改造が完成したあと、われわれは企業の生産と経営を指導するに正しい方針を取らなければならないとして、消費品の質を高め、種類を増やし、生産量を拡大し、サービス業のサービスは周到でなければならない、とあるべき社会の在り方を示している。そのうえで、多数の小工場生産……などを許すことは資本主義的自由市場にもどることになるのか？そうではないとつなげて「我々の社会主義経済の状況は近くこうなる（将是这样）。工商業経営方面では、国家経営と集団（集体）経営が工商業の主体であるが、一定数量の個人（个体）経営が残る。この種の個人経営は国家経営と集団経営を補充する。生産計画方面では、全国工農業産品の主要部分は計画生産に従うが、一部の産品は市場変化に従い国家計画が許容する範囲で自由生産される。計画生産は工農業生産の主体であるが、市場の変化に従い国家計画が許容する範囲の自由生産は計画生産を補充する。ゆえに我が国の市場は、資本主義的自由市場ではなく、社会主義的統一市場である。」（社会主义改造基本完成以后的新问题 19560920 陈云文选第

3卷)

この考え方は、すでに指摘したような計画生産方式の限界を意識している点で、かなり思い切った考え方、提言であるように読める。こうした文書内容は、陳雲を含めた何人かが推敲するはず。と仮定すれば当時、中国の政権内部に市場経済への再移行が検討されていたようにも読めるのである。また当時は移行期で、重要な商品から統制が始まった段階。それ以外は自由生産で市場も存在している。その意味ではこの議論はできるだけ、自由生産・自由市場を大きく残そう、社会主義化に歯止めをかけようとする判断と読むこともできる。

陳雲にとって、商品の質、多様性、サービスの周到さ、などは当然、社会主義社会になっても、維持改善されるはずであった。それが統購統消や公私合営など、自身が進めた社会主義化政策で、失われたことに陳雲自身がとまどい、社会主義化と、こうした商品やサービスの望ましいあり方とをどのように調和させるかを、彼なりに考えた結論が、社会主義の中に市場を残すというアイデアだったのではないか。またここで陳雲が問題にしているのは、最終的な消費者にとっての商品やサービスの質の問題であったといえないだろうか。量的にたくさんのもが生み出されればいいという考え方では少なくともない。

なお陳雲の考え方は1981年に至って党の公式文書の中でなぞられるようになる。

「国営経済と集体経済は我が国の基本的経済形式であるが、一定範囲の労働者個人（个体）経営は公有制経済にとって欠くことのできない補充となる。」「公有制の基礎上で計画経済が実行されるとともに、市場調節の補助作用が発揮されねばならない。」（关于建国以来党的若干历史问题的决议 19810627）

薛暮桥の社会主義経済論の教科書（1983）は第5章冒頭つぎのように書いている。

「社会主義各国の数十年の実践経験が証明するところでは、社会主義建設を進めるには、市場の作用を利用することを含めた、商品貨幣関係の利用は不可欠である。」「今後社会主義経済の建設を加速するに際して、全国人民の日増しに高まる物質と文化生活の需要を満たすうえで、また社会主義現代化を実現するうえで、商品貨幣関係はますます巨大な作用を發揮するだろう。」（薛暮桥 1983 (2009) 99）（なお薛暮桥は第9章末尾で、この市場の部分を「多様な小商品生産」の市場とより限定して書いている。胡耀邦そして趙紫陽の1982年の発言を引用する形で、国民経済の主要部分は厳格に計画管理されるとともに、多様な小商品生産の生産と消費は、市場調節されなければならない。その市場調節の範囲は今後数年縮小されえず、むしろ拡大が適切であるとまとめている。薛暮桥 1983 (2009) 248）

5-3. 市場が解決できない問題への着眼

すでに述べたように自由生産・自由市場を残そうという考え方は、制度的な面で社会主義あるいは計画経済が行きすぎるのが、消費者利益にならないという判断を背景としている。行き届いたサービス、商品の品質、多様な商品種類、そういったことは競争によってこそ確保されるという、ごく常識的な判断を陳雲は下し、自由生産・自由市場で計画生産・計画市場を補充する構想を示したといえる。

ところで計画経済の行き過ぎについて、計画で高い目標値を置くことにも批判の目が向けられている。一つは絶対的な数値として、もう一つはバランスの問題として。

陳雲は1957年1月に中共中央経済工作5人小組組長を担当した。このとき省、自治区、直轄市などの党書記を集めた会議、つまり全国の共産党の党書記を集めた会議で、建設規模を抑えることを主張している、逆に言えば、目標値が高くなりすぎた結果を批判している。

冒頭で基本建設投資や労賃支出、貸出規模が高いことを背景に、生産資

料と生活資料が緊張している＝需給がひっ迫しているとして、建設規模を国力に見合った規模に抑える必要があるとつなげている。経済計画は、国民経済の比例関係を研究するべきだとし、国家の経済建設の行き過ぎを指摘している。公私合営企業にも不適切な合併からの撤退を求めている（建設規模要和国力相适应 19570118 陈云文选第3卷）。

さらに目標に量を置くことの問題は、こうしたバランスの軽視のほか、質の軽視につながるものが問題なのではないか、と考えられる。まず目標値が高すぎる、あるいは結果として均衡を崩すアンバランス問題は、市場経済のもとでも起きる。また、量の追及から質がおざなりになる問題も起きる。こちらはモラルの問題ともいえる。市場があろうとなかろうと、こうした質の問題も起こる。それをチェックする検査、規格、教育などの問題。これは市場があろうとなかろうと、それとは別に生じる問題。陳雲はそういった論点にまで関心を広げている。市場もこうした問題の発生そのものを防ぐことはできない。

少し間をおいて1958年末、杭州で行われた全国基本建設プロジェクト質量杭州現地会議での講演。ここで建設工事の質の確保について、陳雲は詳細な議論を展開している。その冒頭述べているのは会議が開催された理由である。大躍進の掛け声のもと、建設ラッシュが起きている中で、工程の質が確保されず、多数の深刻な死傷事故が生じたというのである。ただ事故の原因は基礎の構造の倒壊によるものが多い。設計—施工—建材—作業の各段階で問題があるわけだが、建築構造の質を低下させる傾向がある（鉄筋コンクリート造りにすべきところを、鉄筋を入れない、あるいはレンガ造りですませるなど）と警鐘を鳴らし、すぐに全国的に検査をすることを求めている（总结经验是提高自己的重要方法 19581223；保证基本建设工程质量的几个重要问题 19581226 陈云文选第3卷）。

この場合、期間内に量の目標を実現しようと、材料を節約しよう、あるいは短い期間で工事を完了しようという動機が、建築構造の引き下げさら

に事故につながっている。それを防ぐには質を問題にするということや、検査の重要性が指摘されている。建材の規格や労働管理、教育の重要性も指摘されている。これらは市場があっても生ずる問題ではないだろうか。つまり、質の問題は市場に任せるだけで問題は解決しない（＝材料の節約使用とか、工期の短縮の仮定での質の低下は、市場があっても無くても、数量の目標を達成することが自己目的化すると生じる。考えられる対策には、規格や検査、労働管理や教育のなどがある：これらは社会的な調整や規制の問題だといえる）が、かなり丁寧に説明されている。

つまり最初は計画における目標値の問題から語り始めているが、目標値が一人歩きして、質が軽視される問題に議論が及び、そこから、公的な規制や監視が必要だということまで、つまり市場に任せるだけでは解決しない領域にまで、彼の議論は進み始めていたように感じられる。

5-4. 毛沢東との対立

大躍進を象徴する出来事の一つは、土法高炉が全国で建設され、鉄の増産がめざされたことだ（1958年）。英国を工業生産で追いつくという目標のもと、いたずらに土法高炉を建設して、鉄の増産が目指されたが、品質の悪い使い物ならない鉄の塊ができただけで、膨大な資源と労力のムダになったとされる。これは形式的に鉄の生産量の増加を目指したことに原因がある。陳雲は持病の心臓病の悪化から1959年6月から休養にはいるのだが、その直前にこの問題を毛沢東に報告している。

「小高炉が産出した900万トンあまりの錬鉄の硫黄量は、冶金部が定める基準の1000分の2を超えて百分の40以上、一説には百分の50を超えている。つまり状況が変わらなければ、基準を超える硫黄を含む四五百万トンの生鉄は、鑄造に用いることも、鋼にして有用な鋼材にすることもできない。これは人民の財を無駄にすること（労民傷財）である。今は硫黄の高濃度を下げる方法を考えるべきだ。选煤（水流で石炭を選別すること）

がカギだというなら、必ず選煤すると定めるべきだ。かつ硫黄量の基準を明確に定めるべきだ。まず選煤しないなら、その錬鉄はいらない。我々は鉄の質について心配していて、これ(質)を変えないというなら、鉄を鑄造してみても鑄造には至らず、錬鋼は1,300万トンに至らない。900万トンの有用な鋼材に至らないともいえる。」(就钢铁指标给毛泽东同志的信 19590515 陈云文选第3卷)

このあと1959年7月2日から8月16日にわたり廬山会議が開かれ、この会議の結果、彭徳懐始め、大躍進に批判的であった人の多くが毛沢東の怒りに触れてそのポストを追われる。しかしたまたま陳雲は心臓病のため休んでいたため出席しなかった。その休養は1959年6月から1960年9月まで。南方で休養していたとも、各地の実情を調査していたともされる。鄧小平も転倒による骨折と同様にこの会議に出なかった(叶(2013)201-220)。陳雲と鄧小平が廬山会議に出席していたら、彭徳懐の側についたかどうか、これはわからない。しかしいずれにせよ陳雲や鄧小平の二人と毛沢東との対立は先送りになった。

陳雲が心臓病で休んでいる間に表面化するの、農業で集団所有制が進むことで、生産性がかえって落ちる問題。理屈としては、集団所有制への移行で労働者の積極性が引き出されるはずだったがそうならなかった。農業生産拡大のため議論の焦点になったのは、請負制の導入問題であった。陳雲は上海青浦などを自ら調査して、農村での請負制(包产到户)政策について、これが生産性の上昇を役立つことを確認する。そして1962年7月にこの点をめぐって毛沢東と意見を交わす。しかし毛沢東の強い不同意の姿勢を目にした陳雲は、病を理由に公務を退いた(叶(2013)219-226; 朱佳木(2000)下120-122)。それでも文革が始まってしばらくした時、陳雲は北京を離れること(離京)を迫られる。

陳雲は、以上のように毛沢東にとって愉快でないことでも、毛沢東に自分の判断を報告することは貫いた。しかし方針をどうするかについては、

毛沢東に判断をゆだね、毛沢東と判断が違ってきた局面で、実際に病気（心臓病）を抱えていたこともあり、病気治療を口実にただ退き毛沢東による批判を甘んじて受けている。

むすび 陳雲そして鳥籠理論の再評価

4人組を粉碎したあとの、1977年3月の中央工作会議で、彼は鄧小平を党中央の領導工作に再び参加させるべきだと発言した。この発言は冒頭で1976年4月5日の天安門事件について、事件は多くの大衆の周総理の死去を悼む気持ちの表れであり、四人組が裏にいるのか（是否挿手）その企みなのか（是否詭計）は調べる必要があると述べている。そのうえで鄧小平同志は天安門事件と無関係であり、中央の指導（領導）に加わることは必要であり、自分は（鄧小平の）指導に従う（拥护）（粉碎“四人帮”后面臨的两件大事 19770313 陈云文选第3卷）として、鄧小平の政權復帰を率先して求めている。この発言は鄧小平の復帰を強く後押しした。

翌1978年11月の中央工作会議では、彼は率先して一連の冤罪事件（冤假錯案）の被害者の名誉回復に言及した。この発言は6つの項目に別れている。最初の3つは党内の名誉回復問題だが、うしろの3つは実は違っている。四番目は文革中に事実上虐殺された彭徳懐の問題だが、この段階では無実だとまではしていない。故彭徳懐同志は、党に多くの貢献があったが、党を除籍になったわけではないとして、名誉回復までは踏み込んでいないが、遺灰を八宝山革命公墓に移すべきことを提言。彭徳懐の名誉回復に向けて、議論の口火を切った形になった。五番目に一般大衆に関係のある天安門事件に再度触れて「これは北京の数百万人による、周総理を悼み、四人組に反対し鄧小平同志批判に同意しない（意志を示す）最初の偉大な群衆運動であった。また全国の多くの都市で同様の運動があった。中央はこの運動を肯定するべきである。」として天安門事件での民衆の行動を支持した。最後の六番目は中央文革の顧問を務めた康生に党組織が麻

痺に至った責任があると断定して、中央にしかるべき会議で批判することを求めている。

以上のように陳雲は、折々に党の方針決定に大きな役割を果たした。まず鄧小平に復権の道を開き、つぎに1976年の天安門事件における大衆の行動を支持することで、鄧小平の改革開放政策への道を整えたのである。

続いて開かれた十一届三中全会(1978年12月)で、陳雲は中央委員会副主席と中央政治局常任委員に選ばれ(1962年から実に16年の時を経て再び党の指導者に正式に戻り)、中央規律検査委員会第一書記を兼ねることになった。一連の名誉回復問題(この間の左傾主義の誤りがもたらした問題)を処理する責任者になった。1935年の遵義会議のあとのロシア行きと同じく、ここでも陳雲は、もっとも困難な仕事をあえて引き受けたように見える。

1979年1月の中央規律委員会第1回全体会議で、陳雲は、この間の毛沢東の責任問題について言及している。まず鄧小平の発言を引用して、毛主席がいなければ新中国はなかったという点に同意し、経済回復と社会主義改造まではうまくいったとする。社会主義建設に誤りがあったのは当然で、それは経験がなかったからとする。そしてつぎのように毛を許している。「革命の領袖に欠点がないこと、誤りがないことは、不可能で空想だ。それは弁証唯物論に合わないし、毛沢東同志本人の意見にも合わない。解放以後、迷惑をかける人もいた(有帮倒忙の人)ということだ。彼らはどんな人か。多くはいい同志だ。けれど盲目で経験に乏しい。全員が等しく経験がなかった。迷惑をかけた最大の原因は慎重でなかった(不謹慎)からだ。我が国はこんなに大きな国だから、諸事慎重(兢兢业业)に行うべきだ。けれどこれまで多くの同志が慎重でなかったのだ」。そのうえで陳をはじめ多くの同志を守った周恩来の貢献や、1975年の末頃から中央の副主席でさえ毛主席と会えない異常な状態に党が陥っていたことを明かしている(在中央規律検査委員会第一次全体会议上的讲话 19790104 陈云文选第3卷)。

なお革命の領袖に欠点や誤りがないことは不可能で空想だという言い方は、1956年9月に陳雲がスウェーデン共産党代表团と接見した席で、スターリンに言及したときにも陳雲が使っている（刘启芳《陈运的苏联情缘》载朱佳木编（2010）617）。

このあと、陳雲は、左傾主義の誤りで生まれた冤罪の処理を進めた。冤罪の処理はもちろん、彼単独の考えではなく党内の合意の上で進められることであり、また名誉回復の範囲に限界もあったが、政権の支持者を増やし政権の安定につながったと考える。

1980年12月に中央工作会議で行なった講話では、広範な問題を論じたうえで、大事な点に論及している。一つは、経験を少しずつ蓄えて慎重に進むことをここでも強調したこと。そして経済建設の目的について「人民生活の改善」にあると言い切ったことである。

「我々は改革が必要だが、歩みはゆっくりであるべきだ。というのは我々の改革の問題は複雑で、急がせることはできないからだ。」「改革は一定の理論研究、経済統計や経済予測にもとづく必要がある。さらに重要なことは、試験地点から改革を始め、随時その結論を総括することだ。すなわち「石をたどって河をわたる（摸着石头过河）」必要がある。最初は歩みを小さく、ゆっくりゆっくり進む。」「経済建設の最後の目的は、人民生活の改善である。」（经济形势与经验教训 19801216 陈云文选第3卷）

もちろん改革開放の進展を期待する側からはこの陳雲の態度は慎重に過ぎるように見えたことだろう。ただゆっくり進むのには別の意味もある。それは教科書通りの社会主義化を急がないということ。そしてそのように捉えると、この言葉の意味が違ってくるのは不思議である。たとえば薛暮桥（2009）27で「われわれはこの20年間急ぎ過ぎる誤りを犯した」として述べられているのは、相当期間、分散した家庭単位生産責任制が併存させて、ゆっくり生産力を高めようという意味である。現在では、この家庭単位生産責任制が発展したものともいえる部分を含む、民営経済が、比重

を高めている。このようにゆっくりの意味を、社会主義化を急がないという意味で理解すると、陳雲の考え方は必ずしも保守的とはいえない。また陳雲の考え方が、社会主義国家でありながら市場経済を進める、現在の中国という国家の在り方につながるのではない。

そして鳥籠理論である。これは1982年の第五届全人代第五次会議での講話のなかにある。

経済効率を高めなければならないとか、今後は時間概念とか利潤概念が経済活動(工作)に不可欠といったことを述べた後の文章。「今後経済を活発にする政策を継続して実行するには、市場調節作用を継続して発揮させる必要がある。ただし我々は経済を活発にする中で、国家計画を離脱する傾向を防止しなければならない。経済が活発であるのは、計画指導の下で活発であるので、計画指導を離れて活発なのではない。鳥と鳥籠の関係と同じで、鳥は手で挟まれていることはできず、挟まれると死んでしまう。飛ばせることはただ鳥籠のなかでできる。籠がなければ鳥は飛んで逃げてしまう。鳥が経済活動だとすれば、籠は国家計画である。……つまり経済活動あるいは市場調節は、計画が許可した範囲で作用を発揮することができ、計画指導を離脱はできないのである。」(实现党的十二制定的战略目标的若干问题 19821202 陈云文选第3卷)

この文章を読むと、この籠がかなり窮屈に見え市場を制約するものに見える、また陳雲も保守的にも見える。しかし籠がなければ鳥が死んでしまう。籠がなければ鳥は逃げてしまう、という言葉の意味をさらに考えると違って見えてくる。籠は鳥の生存の条件を与えるものかもしれない。鳥に飛べる領域を指示しているのかもしれない。つまり鳥籠が意味するのは、市場経済のもとの国家の役割なのかもしれない。

すでに建設工事での事故に絡んで、検査や規格の問題に陳雲が言及しているところ(总结经验是提高自己的重要方法 19581223; 保证基本建设工程质量的几个重要问题 19581226 陈云文选第3卷)を引用したが、1979年の文書で、

水の需給と、工業による汚水処理問題とに注意を促している文献（经济建设必須尽早注意的两个问题 19790617 陈云第3卷）もある。これらの論点（検査 規格 規制 公共財の提供 有限な資源の利用 外部不経済など）は、市場に任せる形では、解決が難しい点である。つまり鳥籠がこうした市場だけでは解決ができない問題の指摘をはらんでいる、と読むことができれば、この鳥籠理論は私たち資本主義社会の理論とすることすら可能だ。

1988年8月、陳雲は李鵬（國務院総理）などにあてた手紙でこう言っている。「汚染防止と環境保護は我が国の一大国策項目だ。極めて重要な問題（事情）と認識（当作）されるべきだ。このことは常に宣伝し、あらゆる限りの大声で怒鳴って人々の注意をひかなくてはいけない。」（治理汚染，保护环境是我国的一大国策 19880827 陈云文选第3卷）

1988年10月、陳雲が中央で責任のある人たち（中央政治局常務委員を含む）との談話で述べたことの要点。そこに以下の文章がある。「企業が請負（承包）責任制を実行することには、良い（积极）面もあるが、良くない（消极）面もあることをみるべきだ。例えば多くの企業が請負の完成のために、設備をないがしろにして、その悪弊がひろがっている。近年、労働災害が増えているのは、おそらくこれが関係している。」「現在、農業生産、工業生産のいずれであるかを問わず、一種の略奪的な資源使用の傾向がかなり一般に広がっていることは、当然重大視（重視）されねばならない。」（当前经济工作的几个问题 19881008 陈云文选第3卷）

つまり陳雲が、鳥籠で示唆したのは、現在の局面での国家の在り方にも通じる、国家のさまざまな経済面での役割なのではないか。

ところで現在の中国共産党の学習教材をみると陳雲への言及は乏しく、扱いは小さい。たとえば2011年に中国共産党90周年を記念して刊行された『中国道路』を見ると、陳雲の名前があったのは1992年6月9日に江沢民が、「六九講話」で「社会主義市場経済体制」の建設を党の方針と提案したことについて、とくに訪問して（专程拜访）賛同を求めた相手とし

て、鄧小平や李先念とともに名前が挙げられているところだけである(『中国道路』(2011)98)。

それが公式の扱いであるにもかかわらず、陳雲に関して書かれた文献の数をみると、2005年の没後10周年以降、文献数は持続的に高くなっている(表3)。陳雲への関心は、周年事業の作られた官製のものとは明らかに違ってきており、党が方針として、陳雲を持ち上げるというより、陳雲に関心をもつ人々の自発的な動きが、陳雲の学習を広げ、陳雲ブームを持続させているようにもみえる。

それは「はじめに」で述べたように実際に陳雲を読んでもみると、陳雲の鳥籠理論は、市場と国家についての、大きな枠組みを示しており、陳雲理論が過渡的な理論ではないと考えられるようになったこと。さらに陳雲の、人民の生活が第一の目的でなければならないといった、「民生」を優先する考え方が、社会主義・共産主義を旗印として掲げる中国社会のなかで、改めて共産党の指針として注目されていること。さらに陳雲が、市場経済

表3 陳雲に関する文献数

年	文献数	年	文献数	年	文献数	年	文献数
1981	112	1991	100	2001	100	2011	471
1982	169	1992	55	2002	110	2012	389
1983	118	1993	133	2003	99	2013	464
1984	171	1994	133	2004	93	2014	445
1985	140	1995	270	2005	883	2015	576
1981-85	710	1991-95	691	2001-05	1285	2011-15	2345
1986	144	1996	200	2006	283		
1987	72	1997	128	2007	271		
1988	74	1998	150	2008	449		
1989	51	1999	85	2009	367		
1990	88	2000	99	2010	430		
1986-90	429	1996-00	662	2006-10	1800		

資料：中国学術文献情報による(検索日2016/08/21)

の負の側面まで論じていたことなど、陳雲理論の枠組みの大きさが改めて評価されていることを反映したものではないか。

中共十三大（1987年）後、陳雲は中央領導工作を退き、中央顧問委員会主任となった。鄧小平から江沢民への政権移行期において、彼は十分役割を務めた。中共十四大（1992年）以降、彼は仕事を離れた。1995年4月10日病により北京で亡くなった。主要著作は『陳雲文選（陈云文选）』全3巻に収められている。

参考文献

中国語文献（刊行年順）

中共中央书记处研究室編《陈云同志文稿选编（1956—1962年）》，人民出版社，1981。

关梦觉《陈云同志的经济思想》，知识出版社，1984。

陈云与中国经济建设编辑组編《陈云与心新中国经济建设》，中央文献出版社，1991。

陈云《陈云文选》第1卷……第3卷，人民出版社第2版，1995。

刘家栋《陈云在延安》，中央文献出版社，1995。

葉永烈《陳雲全傳》，明報出版（香港），1995。

朱佳木主編《陈云和他的事业 陈云生平思想研讨会论文集》上下，中央文献出版社，1996。

朱佳木主編《陈云年谱 1905-1995》上中下，中央文献出版社，2000。（『陳雲年譜』（2000）として引用）

熊亮华《1995年以来陈云研究综述》，《党的文献》2000年第3期，80-84。

刘武生主編《陈云与中共党史重大事件》，中央文献出版社，2001。

尚明轩主編《宋应龄年谱长编》，北京出版社，2002。

中共中央文献研究室陈云研究组《陈云研究述评》上下，中央文献出版社，2004。

金冲及陈群主編《陈云传》上下，中央文献出版社，2005。（『陳雲傳』（2005）として引用）

王家云《陈云的发展观是科学发展观的思想渊源》，《毛泽东思想研究》第22卷第3期，2005年5月，30-33。

薛暮桥《中国社会主义经济问题研究》（1983），人民出版社，2009。

朱佳木《论陈云》，中央文献出版社，2010。

迟爱萍《陈云与中国经济论纲》（下），《党的文献》2010年第4期，43-50。

- 朱佳木編《陈云与当代中国》，當代中国出版社，2010。
- 中央文献研究室《中国道路》课题组《中国道路—马克思主义中国化经典文献回眸》，中央文献出版社，2011。（『中国道路』（2011）として引用）
- 萧一平《延安整风运动—回忆与研究》，中央文献出版社，2012。
- 诸天寅《陈云与马寅初》再版，华文出版社，2012。
- 徐万发《宋应龄与延安时期的中国共产党》，光明日报出版社，2012。
- 邱霞《陈云经济发展思想研究综述》，《党史研究与教学》2012年第2期，91-102。
- 叶永烈《他影响了中国 陈云全传》，四川人民出版社华夏出版社联合出版，2013。
- 叶永烈《历史的注脚》，中华书局，2014。
- 阴雨《『大跃进』运动纪实》，东方出版社，2014。
- 孙大飞 张春和《新中国成立以来中国共产党生产力思想发展研究》，西南交通大学出版社，2014。

日本語文献（刊行年順）

- 高橋満「陳雲の経済理論—もう一つの中国経済発展戦略—」『帝京経済学研究』第36巻第2号，2003年3月，29-39。
- 曹応旺「陳雲と中国改革开放政策の展開」『中国研究月報』第63巻第10号，2009年10月，4-16。
- 福光寛 (2016a) 「中国経済の過去と現在—市場化に向けた議論の生成と展開」『立命館経済学』第64巻第5号，2016年3月，194-222。
- 福光寛 (2016b) 「中国の経済学者 馬寅初（マー・インチュ 1882-1982）について」『社会イノベーション研究』第12巻第1号，2016年11月（刊行予定），1-26。

この論文は成城大学特別研究助成および成城大学経済研究所第二プロジェクトによる研究成果の一部である。